

語り継ぐべき藍染、 そして語り継がれるデニムの創出

「阿波正藍染」は、“通産産業大臣指定伝統工芸”、“徳島県無形文化財指定”の日本伝統の染め技法です。

これまでも本藍染めの名を持つデニム生地・製品は数多く世に出されてきましたが、クロキではもう一度「阿波正藍染」の原点を見直し、「阿波正藍染」の特性・魅力をより深く伝えるデニムを、ひとつのグループとしてカテゴライズしました。

JAPAN SPIRITS 和魂藍

ジャパンスピリッツ わこんあい

これは、日本由来の伝統を継承した藍染めデニム。そして、新たな伝統として進化させた藍染めデニムの総称。日本国内のみならず、グローバルに匠の技を伝えるデニムとして世界に向けて発信していきます。(生産技術の継承)



図1 阿波正藍染の生地構成



図2 阿波正藍染の生地重量と特性の関係

天然藍染(総染め)の特筆すべき2大ポイント

■つなぎ節

つなぎ節は原反表面に現れるコブ状の塊(結び玉)のこと。

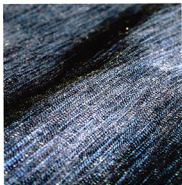
天然藍染めは、糸を束ねた紐を藍染めの中の藍液に漬け、糸にインディゴホワイトを付着させては引き上げて絞る(十分空気に触れさせて酸化させる)という作業を、30回あまり繰り返します。一人の人間がこの作業をするのですから、一回の作業で染められる糸の量は、機械化オートメーションによる人工藍ロープ染めの比ではなく非常に少ないものです。また、30回も繰り返すため、糸にとっては負担も大きく、紐の断ちや糸切れもあり、糸と糸を結びつなぎが必要が生じます。それがすなわち、つなぎ節として原反の場所に現れ、独特の風合いを醸し出します。

■酸化ムラ

藍染めは、空気に触れられることにより酸化させて藍色に発色させます。そのため、紐を絞る空気に触れさせる工程で、紐の束のなかで空気に触れにくい部分が出てきます。その部分は酸化しにくいので、当然藍の発色も弱くなります。これを酸化ムラと言います。天然藍染めデニムの原反には、この酸化ムラのため、タテ糸が数センチのタテ筋となって薄くなっている部分があります。これもまた、天然藍染めデニム独特のもので、天然藍染めデニムの証あるのです。

JAPAN SPIRITS
和魂藍

藍染め



天然藍本来の風合いを最大限に表現した「総染め」の生地、そしてローブ染色により天然藍の可能性を追求した「ローブ染色」の生地をラインナップしています。

